

# ChatGPT を「育てる」とはなにか

## What Does It Mean to “Raise” ChatGPT? Users’ Perceptions and ChatGPT Personality Profiles

赤井志帆<sup>1</sup> 兼松美空<sup>1</sup> 安藤祐介<sup>1,2,3</sup>

Shiho Akai<sup>1</sup>, Mira Kanematsu<sup>1</sup>, Yusuke Ando<sup>1,2,3</sup>

<sup>1</sup> 清泉女子大学

<sup>1</sup> Seisen University

<sup>2</sup> NPO 法人みんなのコード

<sup>2</sup> Specified Nonprofit Corporation Code for Everyone

<sup>3</sup> NPO ビジネス・ブレイクスルー大学

<sup>3</sup> Business Breakthrough University

**Abstract:** 若年層を中心に、ChatGPT との対話を通じて自身の求める回答や特定のスタイルを調整する「ChatGPT を育てる」という表現が広がっている。大学生 9 名を対象に、それぞれの ChatGPT に対する Big Five 性格検査を実施し、利用方法に関するアンケート調査を行った。結果、多くの参加者が「育てる」意識を持っていることが示された。性格検査では、誠実性や協調性が高い「理想的な人格」としての不変的な性格が確認された。「ChatGPT を育てる」とは、AI の本質的な性格を根本から変化させることではなく、話題や対話スタイルの変化であることが示唆された。

## 1 はじめに

### 1.1 背景

2022 年 11 月に OpenAI 社が対話型 AI チャットサービスである ChatGPT を一般向けにリリースした。総務省[1]によると、令和 5 年度の調査における生成 AI の利用経験が 9.1%であったが令和 6 年度の調査で、生成 AI の利用経験が 26.7%へと増加している。特に 20 代の若年層では 44.7%と高い割合を示しており、生成 AI が急速に普及している。生成 AI も ChatGPT や Gemini, copilot などさまざまな種類がある。

数ある生成 AI の中でも特に、ChatGPT は若者を中心に「チャッピー」という愛称で新語流行語大賞[2]にノミネートされる程親しまれ、自分好みに「ChatGPT を育てる」[3]と言われるようになっている。しかしながら、生成 AI の種類による性格の差は研究されているが各々の ChatGPT の違いを通常知ることができない。また、ChatGPT が育った結果も不明である。

### 1.2 目的

本研究の目的は、利用者ごとに対話される ChatGPT に差異が生じているのかを明らかにし、その差異が利用者の「ChatGPT を育てる」という意識や利用方法の違いによって影響を受けているかを検討することである。そのために下記のリサーチクエストンについて検討する。

RQ1:利用者は ChatGPT を「育てる」という意識を持つのか

RQ2:それぞれの ChatGPT の違いが性格検査に現れるか

RQ3:利用方法と ChatGPT の性格は関連するのか  
以上の三点を通して、ChatGPT と利用者との相互作用の特徴を明らかにすることを目的とする。

## 2 先行研究

### 2.1 Big Five

1980 年代以降、多くの研究によって「外向性 (E)」「神経症傾向 (N:情緒不安定性)」「誠実性 (C)」「調

<sup>1</sup> 連絡先: 清泉女子大学地球市民学部

〒141-8642 東京都品川区東五反田 3-16-21

E-mail: yando@seisen-u.ac.jp

和性 (A)」「開放性 (O)」の5つの基本的特性 (Big Five) [4]が、文化や言語を超えた安定した枠組みであることが示されてきた。

## 2.2 生成 AI と Big Five の関連

生成 AI と Big Five を組み合わせた研究は国内外でさまざまな活用が報告されている。田中ら[5]は生成 AI に Big Five を利用して人格を付与する研究についてある程度反映した出力が可能なことを報告している。また桐淵ら[6]は生成 AI のモデルの同一性の確認に Big Five を利用し個別の調整の上で同一と判定できることを報告している。

本研究では Big Five を用いてそれぞれの ChatGPT の違いを把握することを試みる。

## 3 方法

### 3.1 参加者

本研究では、2025年12月11日に論文著者ら含むゼミ生7名を対象として調査を実施した。後日2名の学生も調査に参加し、最終的な人数は9名である。またアンケートフォームを用いて ChatGPT の利用方法についてのコメントを回収した。参加にあたっては匿名で研究に利用されることについて同意を得た。

### 3.2 ChatGPT に対する性格診断

はじめに、性格診断ツールである Big Five を用い、各参加者が普段利用している ChatGPT の性格診断を行った。その後、同一の参加者に、「ChatGPT を育てる」という意識に関するアンケートを実施した。分析にあたっては、特に性格診断の結果において違いが大きく見られた項目に着目し、検討を行う。

なお、本研究では実験を円滑に進めることを目的として、性格検査は、HITOSTAT が提供するオンライン版 Big Five 性格診断[7]を利用した。

### 3.3 アンケートの実施

アンケートの実施を通して、以下の質問への回答を求めた。

- ・ ChatGPT を育てるといった用語の認知度や使用度
- ・ 自分との対話に合わせて AI が変化しているという実感の有無
- ・ AI に対する接し方 (褒める・叱る・お礼を言う等)
- ・ ChatGPT の使用目的 (友人として、道具として等)

## 4 結果

### 4.1 ChatGPT の Big Five 診断の結果

参加者の回答から Big Five を算出した結果は図1

のとおり。協調性、誠実性、開放性の3因子において、いずれも高いスコアを記録した。その一方で外向性、神経症傾向に関しては、参加者によって結果にばらつきがある傾向が示された。

プラン	外向性	協調性	誠実性	神経症傾向	開放性	
A	無料	4.25	5.00	5.00	1.25	5.00
B	無料	2.75	5.00	5.00	1.50	5.00
C	無料	3.25	4.50	4.50	2.00	4.75
D	有料	2.75	4.50	4.50	1.50	5.00
E	有料	3.00	4.75	4.00	1.75	4.50
F	無料	3.00	4.50	4.25	3.00	3.25
G	無料	4.00	4.50	3.75	2.75	3.50
H	無料	2.50	3.75	4.00	2.00	4.50
I	無料	3.25	5.00	4.75	1.75	5.00

図1 Big Five 診断結果

有料版の利用者は少なかったが無料版との傾向の差は見受けられなかった。算出された結果をPCA(主成分解析)で2次元に投影し、K-Means で2クラスタに分類したレーダーチャートが図2である。この図では神経症傾向と開放性がクラスタ間での差が大きいことが示された。

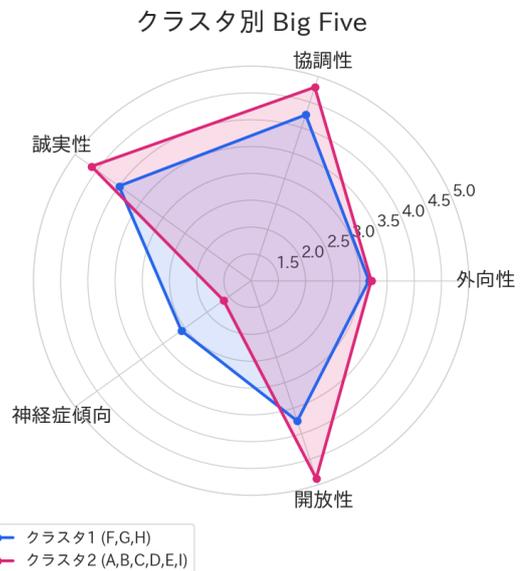


図2 タイプ別 Big Five の結果

### 4.2 アンケートの分析

#### 4.2.1 ChatGPT を育てることについて

図3のように大半が「ChatGPT を育てる」という表現を認識しているが「育てる」という言葉を自ら

使わない。また、育てることで回答が変わるという感覚があるという人が大半であった。

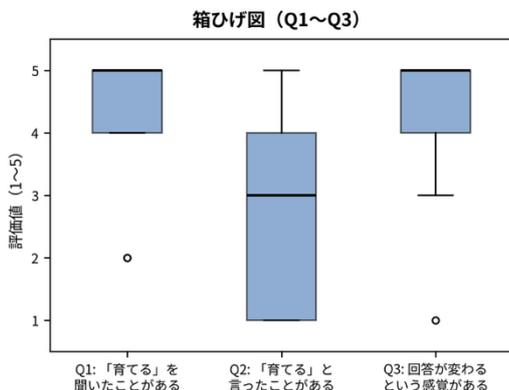


図3 ChatGPT を「育てる」に関する結果

#### 4.2.2 ChatGPT の使い方について

また、図4のように利用している ChatGPT に対し大半は好みだと感じている。好みではないと感じているのは2名であった。

褒めたりお礼を言うことについては、図4のようにばらつきが大きく両極端の傾向が見られた。ChatGPT にお礼を言わず、厳しく指示するもしくは叱る利用者の ChatGPT は神経症傾向が他と比べて高いという傾向が見られた。

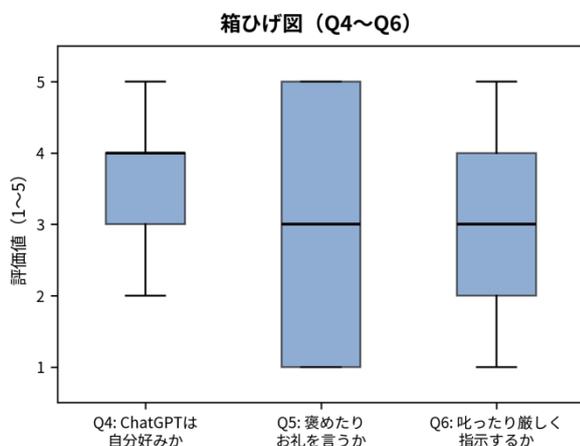


図4 ChatGPT の使い方について

#### 4.2.3 ChatGPT の利用目的

図5のようにばらつきがあるが、約8割が相談相手というよりはメインを道具として使っている。相談相手寄りの回答を行った参加者の ChatGPT とその他の参加者を比較して目立った特徴は示されなかった。

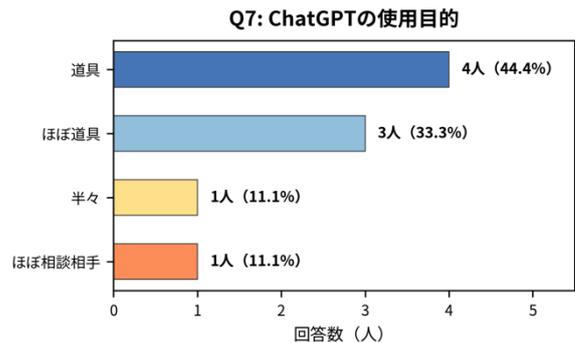


図5 ChatGPT の利用目的

## 5 考察

### RQ1 利用者は ChatGPT を「育てる」という意識を持つのか

アンケートの結果より、育てるという意識を持っている利用者が多いことが分かった。これは利用者が ChatGPT との対話の積み重ねを通して、回答が変わっているという感覚を持っているということが考えられる。この感覚が特定のカスタマイズ機能 (Custom Instructions, メモリ機能等) の登場以前からコミュニティ内で散見されていた点からも認知度の高い表現である。また ChatGPT の回答が変化すること、自分好みであるという回答が多かったことから利用者は変化を好意的に捉えていると示唆される。

### RQ2 それぞれの ChatGPT の違いが性格検査に現れるか

実験の結果より各々の ChatGPT の性格はほとんど違いが無いことが示された。ChatGPT が対話履歴を学習し、回答をパーソナライズさせる一方で、その回答の基本的なふるまい方は開発段階で不変的な性格として設計され、日常的な会話で話題や口調を利用者に合わせて変化させても性格は簡単に変わらないという可能性が示唆された。

あるいは今回使用した Big Five などの性格検査は、本来人間を対象とした性格診断であるため、AI 自身が客観的に答えているのではなく、学習データに基づいた理想的な回答をしている可能性もある。また、言葉や言い方の違いによって、回答が大きく変わる可能性もある。

### RQ3 利用方法と ChatGPT の性格は関連するのか

今回の参加者の ChatGPT のほとんどは外向性が高

く神経症傾向が低いポジティブで安定タイプであったが、一部外向性が低く、神経症傾向が高い思慮深い聞き役タイプがいた。

この思慮深い聞き役タイプに共通して「AIを積極的に褒めない」「叱る(指摘する)」「純粋な道具として利用する」という共通の使い方をしていた。このような使い方が参加者のChatGPTのBig Fiveへの回答へ影響を及ぼしている可能性があるとする唆される。

## 6 課題

研究の結果、実施者数が少数であったこと、ならびに本研究で用いたBig Five尺度が簡易的なものであったことから、各々のChatGPTの性格に明確な差異は示されなかった。利用する尺度をより正確性が高いものにすることや、参加者を拡大することで異なった傾向が示される可能性がある。

## 7 まとめ

本研究では、「ChatGPTを育てる」という表現が用いられるようになっていくことからChatGPTに性格的な違いが生じているのかを明らかにするとともに、その違いが利用者の「ChatGPTを育てる」という意識や利用方法の差異によって影響を受けているのかを検討することを試みたが、性格診断の結果には大きな違いは表れなかった。

このことから、「ChatGPTを育てる」とは、ChatGPTの性格の本質的な部分に変化しているのではなく、利用者の好みや対話スタイルに適応するように調整しているに過ぎない可能性があると考えられる。

一方で利用者は変化を好意的に受け止めており「ChatGPTを育てる」という表現はカスタマイズ機能の提供以前から見られたことから利用者が「AIを自分好みにしたい」という願望の表れと言えるのではないだろうか。

## 参考文献

- [1] 総務省, 個人における AI 利用の現状, 情報通信白書 令和 7 年版, <https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r07/html/nd112210.html>, (参照日 2026-02-13)
- [2] 日本経済新聞, 「古古古米」や「チャッピー」流行語大賞候補 30 語, 2025 年 11 月 6 日, <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUD055EV0V01C25A1000000/>, (参照 2026-02-13)
- [3] 中原瞭太朗: ChatGPT を「育てる」3 つの方法をご紹介, Task hub マガジン, <https://taskhub.jp/magazine/exercise/chatgpt/8815/>, (参照日

2026-02-13).

- [4] 和田さゆり: 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成, 心理学研究, Vol. 67, No. 1, pp. 61-67 (1996).
- [5] 田中葉月, 飯田愛結, 福田聡子, 中島亮一, 大澤正彦: 対話型人工エージェントは個性を持つか?: Big-5 を付与した大規模言語モデルの応答の観察, HAI シンポジウム 2024, P-60 (2024).
- [6] 桐淵直人, 芦澤奈実, 大木哲史, 西垣正勝: 検証可能な AI の利用に向けた検討: 性格特性を用いた大規模言語モデルの同一性検証, 暗号と情報セキュリティシンポジウム (SCIS 2024), 2B3-4 (2024).
- [7] HITOSTAT, 5 因子であなたの性格を解き明かすビッグファイブ性格診断, <https://hitostat.com/ja/tests/big-five-personality-test/>, (参照日 2026-02-13)